2023年度TLPシンポジウム

トライリンガル・プログラム (TLP)
10年間の成果と展望

報告書

第1部　TLPの運営

第2部　TLPのいま

第3部　TLP修了生の現在

第4部　TLPのこれから

2023 年度　TLP シンポジウム

トライリンガル・プログラム（TLP）
10年間の成果と展望

日時：2024年2月10日（土）14:00-17:30

開催形態：オンライン（zoom）

主催：東京大学教養学部附属グローバルコミュニケーション研究センタートライリンガル・プログラム

参加登録用フォーム　https://u-tokyo-ac-jp.zoom.us/meeting/register/tZckcOmprzIoHNczav1RGUTatpKOFzbl4d3o

Program

開会の挨拶　宮地　隆廣（教養学部・スペイン語）　14:00-14:05

【第1部】TLPの運営　14:05-15:00

◆石井　剛（教養学部・中国語）
◆受田　宏之（教養学部・スペイン語）
◆三ツ井　崇（教養学部・韓国朝鮮語）
◆鄧　芳（大学総合教育研究センター・中国語）
◆サンブラノ　グレゴリー（大学総合教育研究センター・スペイン語）

【第2部】TLPのいま　15:00-15:35

◆全6言語の現役TLP生

～休憩～　15:35- 15:45

【第3部】TLP修了生の現在　15:45-17:00

〈中国語〉　大門　かおり（経済産業省）
〈ドイツ語〉　中桐　悠一郎（東京大学医学部医学科）
〈フランス語〉　小笠原　日奈（外務省）
〈ロシア語〉　山田　涼華（東京大学公共政策大学院修士課程）
〈韓国朝鮮語〉　西岳　和生（東京大学文学部人文学科倫理学専修課程）
〈スペイン語〉　五ノ井　杏（東京大学大学院教育学研究科修士課程）

【第4部】TLPのこれから　17:00-17:25

◆寺田　寅彦（教養学部・フランス語）
◆鳥山　祐介（教養学部・ロシア語）

閉会の挨拶　17:25-17:30　鳥山　祐介（教養学部・ロシア語）

第1部

TLPの運営

TLP 発足時の理念とその後

石井　剛（教養学部/東アジア藝文書院）

TLP が中国語で始まった理由について述べるために、まず TLP がグローバルコミュニケーション研究センター（グロコミ）の管轄下にあることの意味を振り返ろう。そのウェブサイトに掲げられているとおり、グロコミは教育を行うのではなく、「教育システムを多角的に研究」し、「実践的な人材養成プログラム」を策定し実施に移すことを目的としている。したがって、TLP 制度の根幹は外国語教育の枠組みとは異なる。教育プログラムとして既修外国語/初修外国語の枠組みの中で行われてはいるが、制度上はグロコミの研究成果に基づいており、常に可塑性と発展性を内包している。

西洋近代文明はアメリカの世界的ヘゲモニーへと収斂し、西欧諸言語は相対的にその地位が低下した。そうした中で、東アジアに位置する東京大学において、中国語を英語と共に身につけることは、英語の一極化としてのグローバル化に対して批判的な知性を涵養し、新たなロゴスを世界に向かって提示するために依拠すべき方法である。したがって、TLP の目標は、単に中国語を巧みに使いこなし、中国の諸事情に精通した人材を育てることではない。英語と中国語を、世界に対する新たな認識と想像を構築するために表裏をなすロゴスの資源と見なしそれを学ぶことこそが当初の目標だった。この理念は、教養学部後期課程の学融合プログラム「東アジア教養学」（後期 TLP）へと発展して今日に至っている。東アジア藝文書院が北京大学と共に運営するこのプログラムでは、クラシックスの読解を中核に据えつつ、英中日三言語を駆使して世界的諸課題に哲学的アプローチを試み、言語や文化の背景を異にする学生たちが共に人として豊かに成長していく教育が実践されている。

TLP のもう一つの重要なポイントは社会連携プログラムであることだ。大学が真に社会的共通資本として機能するために、その知が社会によって具体的に支えられていることはきわめて重要である。

TLP は教育プログラムとしてエリートプログラムであるが、これを一部の学生に対する特権的優遇を意味すると理解してはいけない。TLP は英語習熟度別クラス編制とセットで行われており、毎学期行われるレベル変動に併せて履修者を入れ替える必要がある。つまり、TLP は入学後に学生の向上心を刺激する仕組みであり、その全学的波及効果はその意味において測られねばならない。優秀な学生のポテンシャルを解放するためのプログラムとして TLP は重要な役割を果たしている。

TLP は今後東京大学が世界を牽引するために創造する新たなロゴスの揺籃として機能すべきだ。グローバル化に加えて AI などの技術が急速に優勢になりつつある現状のなかで、大学の基礎教育段階における外国語学習の意味は根底から揺らぎかねない。次の十年で TLP が挑戦すべき最大の課題はここにある。

TLP の運営―スペイン語の場合―

受田　宏之（教養学部）

私は TLP スペイン語に発足から関わってきました。新入生 3,000 人のうち毎年 800 人前後が第二外国語として選択するスペイン語は、一、二位を争う人気のある言語です。その一方で、スペイン語の教員数は十分ではなく、特に上級者向けクラスにおける教員不足は深刻です。TLP スペイン語が始まったのは 2019 年で、現在対象となっている6つの言語の中で最後に導入されました。

TLP スペイン語は例年、約 40 名の学生を受け入れてきました。一列と二列の基礎科目は各人がばらばらに受講するものの、TLP 固有の授業であるインテンシブと演習については、文系と理系の 2 つに分かれて一緒に受講します。そして、2 年後に修了できるのは約半分の 20 名です。TLP ではない通常のスペイン語のクラスはおおよそ一クラス 40 名ですので、TLP のクラスは少人数です。TLP には「選ばれしエリート」という側面があるのです。

TLP スペイン語には 2 つの特徴があります。一つ目が、ネイティブ教員であるベネズエラ出身のグレゴリー・サンブラーノ先生の存在です。サンブラーノ先生は優れた文学者であると同時に、教育経験も豊富です。学生たちは 1S、1A、2S を通じて多くのスペイン語科目を履修しますが、サンブラーノ先生の授業は必ず受講することになります。サンブラーノ先生は研修にも随行するので、入学時から修了まで、信頼できる先生に見守られながら成長を遂げることになります。

もう一つの特徴として、実践の場として 2 年生の夏休みにメキシコで研修を行い、スペイン語圏の魅力に触れることがあります。コロナ禍と重なった年はオンラインでの研修となりましたが、ようやく昨年度からは対面で実施できるようになりました。学生の準備への取り組み、現地の大学生や市民との交流の深さは、対面の方が密度が濃いと感じています。食事や寒暖の感覚といった身体性を伴う経験も対面ならではです。

発足からようやく5年に差しかかるに過ぎないので、TLP の評価については憶測に近いことしか言えないのですが、理想的なスペイン語教育が実現されているのではないかと思います。今までの修了生のうち、教養学部教養学科・地域文化研究専攻ラテンアメリカコースに 3 名が進学しています。また、スペイン語 TLP では CEFR の A2 に到達することを目標としているのですが、本年度の場合、検定試験の結果、2 年生で A2 に達した者が 6 名、B1 が 8 名、B2 が 2 名となりました。実に半数以上の修了生が目標以上の能力を得たことになります。

とはいえ、TLP には課題が多いのも事実です。入試英語の成績という基準が一部学生の同質化をもたらしています。もう少し選抜基準を多様化してもいいかもしれません。また、運営に関わる事務作業が大変で、効率化が求められます。授業の中身についても、ネイティブの先生に任せきりにせず、私たち非ネイティブの教員がもっとコミットできないかと考えています。最後に、研修先はこれまで、サンブラーノ先生と私に縁の深いメキシコだったのですが、これからはスペインなど別の国も候補になり得ます。さらに言えば、日本国内でもかなりスペイン語が話されている自治体があるので、そういったところを訪れる短期国内研修も長期的には検討する余地がありそうです。

TLP 韓国朝鮮語の成果と展望

三ツ井　崇（教養学部）

1．TLP 韓国朝鮮語の沿革

先述のとおり、TLP 韓国朝鮮語は 2018 年度に発足した。発足当初は履修希望者数、履修許可者数ともに決して多いとは言えなかった。2020 年度以降になると年度初めの履修希望者数が増加し、それにともない履修許可者数も増加した（とはいえ 10 名未満の小規模ではあるが）。しかし、一方で、年度末の修了者数をみると、履修許可者数に遠く及ばず、これまで 1～3 名の間で推移してきているような状態で、軌道に乗っているとは決していえない。

2．TLP 韓国朝鮮語のカリキュラム

TLP 韓国朝鮮語では、一年次に基礎科目である一列・二列と総合科目である初級演習、初級インテンシヴを、二年次に総合科目である中級演習と中級インテンシヴをそれぞれ所定の単位数分履修することになっている（理科生は初級・中級ともに演習は任意選択）。また、これとは別に「国際研修」としてソウル大学校韓国語サマープログラムを開講している。このサマープログラムは 2018 年度より開講していたが、2019 年度までは TLP 履修生の参加はみられなかった。TLP 履修生の参加が見られたのは 2023 年度からであり、成果の判断にはもう少し時間がかかるだろう。

3．TLP 韓国朝鮮語の課題と展望

では、TLP 韓国朝鮮語の課題について 2 点挙げ、今後を展望するための材料を提供したい。

（1）履修者数、修了者数の問題

先述のとおり、TLP 韓国朝鮮語では履修希望者数、履修（許可）者数の増加の反面、修了者数が伸び悩んでいる。その主たる要因は、履修者における英語の成績の維持という問題である。TLP が 3 言語の能力の向上を前提としている以上、英語においても高い能力を維持する必要があることは言うまでもないが、逆に、修了のために資格を満たすこと自体が目的化してしまっている印象がある。非常に悩ましいところである。

（2）韓国朝鮮に対する総合的な知の獲得に向けて

そもそも、TLP 韓国朝鮮語の目的はどこにあるのか。グローバルコミュニケーション研究センターの TLP 紹介のサイト上では、「高度な韓国朝鮮語能力を身につける」だけでなく、「日本と朝鮮半島が位置する東アジア地域を足場に、グローバルな課題に取り組んで行ける人材を養成すること」（http://www.cgcs.c.u-tokyo.ac.jp/tlp/index.html#six）として掲げられている。しかし、現在のカリキュラムでは、それ以前に、「韓国朝鮮語」から「韓国朝鮮」に対する学習の回路が存在しないという問題を抱えている。このような目的の実現に向けて、TLP カリキュラムとしてどこまで可能なのか、後期課程教育とのつながりをどう考えるか、教員の負担、リソースの問題をどう考えるかなど、大きな課題を抱えている。今後、他の言語の取り組みなども参照しながら、考えていきたい。

TLP 中国語の現場から

鄧　芳（大学総合教育研究センター）

（1）なぜ中国語か

TLP 中国語は 2013 年度に始まり、2014 年度から本格的に実施され、2023 年度で 11 年目になりました。TLP の準備が動き出したのは 2012 年の秋で、ちょうど日中関係の悪化が話題になった時期にあたります。東大でも中国語履修者が減少しましたが、当時刈間文俊先生は「日中関係が最も悪化した時期だからこそ引き受けるべきだ」という使命感をお持ちになったそうです。

それから十二年経ちましたが、現在の日中関係は当時よりもさらに厳しいものがあります。TLP 中国語の運営には直接の影響が出て、私のような中国人教員でも中国の現状に不安を感じることがあります。しかし、今年度の修了生や、南京サマースクールの参加者の言葉から中国への親近感、「近さ」がうかがえます。中国語を学べば自分自身で複雑な中国を実感することができます。「このような時期だからこそ」あえて中国語を学ぶ意義は大きく、教員として改めてやりがいを感じる今日この頃です。

（2）学生の選抜、クラス構成と修了

TLP 中国語の選抜要件は、他の言語と同様入学試験の英語科目で上位一割に入っていることです。ただし、他の言語の TLP と異なり、教養学部の一般的な初修外国語と同じ「理Ⅰ」「理Ⅱ・Ⅲ」と「文Ⅰ・Ⅱ」、「文Ⅲ」の区分でクラス編成が行われます。実際の授業は、理系 1 クラスと文系 2 クラスの計 3 クラス体制で運営しています。現場の教員としての感想ですが、TLP 初修中国語クラスの存在はメリットが多いと思っています。

修了要件については、2022 年度入学生から HSK の受験が修了要件に加わりました。

（3）授業

勉強意欲の高い学生の要望に応えるため、2013 年の発足以来、TLP 中国語はカリキュラムに様々な変更を加えてきました。今は 1S 週 5 コマ、1A 週 4 コマ、2S 週 3 コマの構成になっています。他言語の TLP と異なるのは、後期 TLP 科目が開講されていることで、S には上級会話、上級作文、上級読解をそれぞれ 2 コマ、A には中級会話、中級作文、中級読解をそれぞれ 2 コマずつ開講しています。さらに、EAA の教育プログラム「東アジア教養学」に、前期の TLP を修了した学生が参加しています。

（4）海外研修

南京研修は 4 年ぶりの現地開催でした。学生の声：「隣接する国の間には色々な問題が起きるものであり、双方が固有の相異なる信条を持っているのは当然のことであるから、交流するうえでは細心の注意を払わなければならない。とはいえ、隣国としての関係を途絶したり敬遠したりしていては進展は望めない。これは大変な難題ではあるが、今回の交流を通して、それを身をもって体感できたこと、そして冷静に歩み寄り互いに考えられたことは、解決の糸口を探るうえで非常に有意義だったと思う。」

TLP スペイン語の現場から

サンブラノ　グレゴリー（大学総合教育研究センター）

TLP スペイン語は 2019 年に始まりました。文系と理系あわせて 40 名の第 1 期生が、スペイン語を学ぼうという期待を胸に教室にやって来ました。新しい言語を身に着けることで、言語自体の知識だけでなく、スペイン語が話される様々な国々の文化についても知ることになり、学生の理解の地平が広がりました。

2022 年と 2023 年の夏には研修でメキシコに行き、教室で学んだ知識を実践的に活用することができました。文法の学習に加え、メキシコの芸術や歴史、建築、メキシコの食文化などに関連するテーマの講義が 1 週間で集中的に行われ、学習の意欲を大いに高めるものとなりました。同様に、テオティワカンやラブナ、カバー、ウシュマルといった遺跡、国立人類学博物館やコレヒオ・デ・メヒコ、フリーダ・カーロの家／博物館、国立芸術院などの文化施設を訪問する中で、学生はメキシコ人学生と交流し、友情を築くことができました。両年の研修とも第一週の活動は、歴史的・文化的に重要性の高い空間での活動と教室での座学を組み合わせたものとなりました。

2022 年には、メキシコ植民地期の文化的要素にあふれる地域に行くことができました。ケレタロ、サン・ミゲル・デ・アジェンデ、グアナフアトなどの都市をガイド付きで訪ねました。2023 年にはメキシコの南部、具体的にはマニ市をはじめとするユカタンのマヤ文化の地域を訪れました。学生はアグロエコロジーの学校の活動に参加し、動植物のことや伝統医学の実践、トウモロコシやマメ、チリなど主な同国産食料を栽培する古来の方法に触れました。同時に、先植民地期の建築と、現在もなお残っている当時の文化的実践を知ることもできました。多くの学生は研修以前に日本を離れたことがなく、ほとんどの学生にとってスペイン語圏の国を訪れるのは初めてのことでした。

研修は、人間らしさという観点からして、非常に強烈な経験でした。それまでに知らなかった味や匂い、自然の美しさを発見できたことに加え、常に他者と感情的なつながりを持ち、団結し、そして互いを尊重していました。この経験は間違いなく、学生が自分自身を、そして自分の周囲を理解することに資するでしょう。この意味で、研修は非常に良好なものであったと言えます。

研修が持つ文化的な意味での重要性とは、自分のものの見方に向き合い、比較や対比ができるようになることにこそあります。研修での経験は、言語や文化を理解することを越えて、スペイン語圏の人々との友情の絆を築き、それを深め、グローバルなコミュニケーションの重要性を理解することにつながるでしょう。学生たちは多様な文化を知り、そして何より重要なこととして、彼らが出会った人々が持つ特徴や価値、歴史的・文化的経緯を理解することができました。研修は学生たちを人間として豊かにする経験であったのです。

第2部

TLPのいま

中国語

大岸　希誠

私は文系の学生で、中国語 TLP の 1 年生です。本日は、このような場で話すという滅多にない機会を頂き、ありがとうございます。現役 TLP 生の声を聞くというテーマに即して、何を話そうか考えたのですが、ここでは TLP を通じて出会った人々にフォーカスして、お話しできればと思います。

まず良かったことを言いますと、TLP では選抜をくぐりぬけて来た、能力の高い人たちと出会い、本当に大きな刺激を受けました。私は高校時代から中国語を勉強していたのですが、こうした自分の持つアドバンテージを軽く飛び越えてくるような、習得の速度の非常に高い人がいました。海外に住んでいた経験のある人も多く、その人たちと必修の英語の授業を一緒に受けることで、学習のモチベーションが高まりました。

また、TLP のクラスは一つのコミュニティのように機能しています。多くのコマ数がある中国語や英語の授業を一緒に受けることが、こうした仲の良さにつながっているのだとひしひしと感じています。五月祭や駒場祭にも私たちは一緒に参加しています。

一方、TLP 生の選抜には改善の余地があるとも感じています。まず、TLP の広報にもっと力を入れるべきです。入学前の時点で TLP のことを知らない人がいる一方、逆に割と軽い気持ちで TLP を希望する人もいたことは意外でした。単に魅力的なことだけではなく、海外研修でも参加者は選抜で決まること、勉強が割と大変であること、語学のコースというよりは、先ほどの石井先生の言葉を借りれば、中国語を通じてグローバルなロゴスの相対化する目的があるなど、より多くの情報が提供されるべきだと思います。

また、海外経験がある学生がいるという意味での多様性はある一方、国内的な学生の多様性は低いかなとも感じています。授業で「中国語で出身県を言ってみよう」という練習をしたのですが、ほとんどの学生が関東や関西の出身で、後から聞いてみると、大体が有名進学校の出身者でした。これは英語力に基づく選抜の方法に原因があるのかもしれません。

さらに言えば、TLP のメンバーが固定的なことで、井の中の蛙になっているように感じることもあります。サークル活動で TLP ではないレギュラーのコースで中国語を履修している学生と会ったのですが、その人の中国語の能力の高さに驚いたことがあります。TLP でなくても中国語の学習を頑張っている人たちがいることを認識する機会があれば、TLP の学生も刺激を受けるのではないかと思いました。

このように、TLP は多くの魅力と共に、いくつかの課題も抱えています。これらの課題に取り組むことで、より充実したプログラムになると信じています。ありがとうございました。

ドイツ語

青木　彩

私は教養学部文科三類 2 年で、後期課程では国際関係論コースに進学予定です。1 年半に及ぶドイツ語 TLP を受講した所感をお話したいと思います。私は幼少期にスイスに住んだ経験から、第二外国語としてドイツ語を選びました。そして、第二外国語を一から集中的に学べる TLP の制度を知り、ドイツ語を操れるようになりたいと思い、TLP への参加を決めました。

週 3 コマの TLP 授業では予習と復習が必須で、特に 1 年の S セメスターでは苦労しました。しかし、授業は楽しく、少人数制であるため一人一人の発言機会も多く、グループワークを通じて TLP の仲間と楽しく学ぶことができました。ドイツ語の授業では教科書から言葉を学ぶことにとどまらず、現在のドイツの社会的トレンドやジェンダーへの関心など、先生方の生の声を通してドイツに関する知識を得ることができました。

1 年生の夏にはゲーテ・インスティテュートによる夏季集中語学講座、秋にはオーストリアの学生とのグループワークやダークツーリズムを題材にしたプレゼンテーション、冬にはケルン研修、そして 2 年生の夏にはミュンヘン研修と、様々なプログラムにも参加しました。ケルン研修やミュンヘン研修では、先生がそれまでに教えて下さった現地の空気感、そして教科書で学んできた世界のことを肌で感じることができ、大きな感動を覚えました。ドイツ語の知識を身につける前に訪れたドイツと、知識と文化を学んだ後に訪れたドイツは、まるで別世界でした。とりわけ、ミュンヘン研修で訪れたダッハウ強制収容所は強く記憶に残っています。

現地の学生との交流も刺激的で、日本について学んでいる学生とのディスカッションを通じて多くを学びました。ドイツ人の議論好きな性格も体験することができました。あまり積極的に発言できなかったことに少し後悔しているので、今後は言葉が拙くても、もっと積極的に議論に参加したいと思っています。

TLP で学んだ期間は 1 年半です。この短い時間で、私はドイツ語能力を大いに伸ばすことができました。最終的には、ゲーテ・インスティテュートの検定試験で CEFR の B2 を取得することができました。

TLP の今後に向けて、1 つだけ言うことがあるとすれば、それは TLP ドイツ語のクラスについてです。クラスは 2 つに分かれているのですが、もう一方のクラスと関わる機会がなく、結局一言もしゃべらずに終わってしまった学生もいて、少し残念でした。たまに合同で授業を行うなどできれば、同じドイツ語を学ぶ仲間として、より密に交流できたのではないかと思いました。

今まで授業を受け持ってくださった先生方、プログラムや研修でお世話になった先生方に感謝申し上げます。ご清聴ありがとうございました。

フランス語

秋場　千慧

皆さんこんにちは。私はフランス語 TLP に 1 年の A セメスターから編入しました。ですので、参加した期間は 1 年間ということになります。私は当初、TLP は帰国子女向けだと思っていまして、自分には縁がないものと考えていました。一方、中学・高校時代から語学に興味があったことから、1 年生のSセメスターではフランス語のインテンシブ科目を受講し、必修と合わせて週 5 コマのフランス語科目を履修しました。学期末になって、先生から TLP の編入試験を勧められ、半ばダメもとで受験したところ、編入の許可を頂きました。TLP に参加してからも、週 4 から 5 コマのフランス語の授業を受けました。

TLP では 2 度の海外研修に参加しました。最初の研修ではパリとリヨンを訪れ、現地の大学生と交流し、市街観光もしました。また、パリの高等師範学校（エコール・ノルマル・シュペリウール）では明治時代におけるフランス人美術商の日本での活動について発表しました。1 年前にはフランス語の素養を全く持たなかった私が、フランス語で発表する機会を得たのは、まさに TLP のおかげです。2 年生の夏休みにはパリとアンジェで研修し、ホームステイや現地の大学での学習を経験しました。拙いながらもフランス語を使って、現地の人たちと交流できたことはとても思い出深いです。

TLP の魅力は、生徒のモチベーションの高さと、実践力を重視するカリキュラムにあります。英語とフランス語の双方で高い成績を維持する必要があるため、生徒は意欲的で、互いに刺激を受け合っています。こうした環境の中で、私はフランス語に一層力を入れて勉強することができました。また、TLP の授業ではインプットだけでなく、アウトプットも重視され、実際に言語を使う訓練が多く行われました。これにより、自分でフランス語を運用する力がつきました。

個人的な経験について言えば、TLP を継続する上で、私は特に英語で苦労しました。私は英語の成績が並外れて高かったわけではなく、TOEFL での成績を向上させるため、大学受験以来の猛勉強をしました。フランス語でもまた、他の学生と自分を比較して落ち込むこともありましたが、同時に成長できたと感じることもあり、こうした気分の浮き沈みを繰り返しながら、力をつけてこられたと思います。

私は後期課程で、教養学部のフランス地域文化研究コースに進む予定です。そして、フランス語圏の大学への留学を目指し、検定試験である DELF の勉強を進め、フランス語に向き合い続けています。まだまだ思うようにできないことはたくさんありますが、TLP で得た経験を生かして、学習を続けていきたいと思います。ありがとうございました。

ロシア語

三上　航世

私は東京大学文科三類 2 年で、後期課程では教養学部教養学科地域文化研究分科のロシア・東欧コースに進学する予定です。私は入学から 1 年半、TLP でロシア語を学習しました。修了生の立場として、振り返りながらお話ししたいと思います。

私は大学入学前から外国語学習に楽しさを感じており、大学でも新たな言語を集中的に学びたいと考え、TLP に参加しました。入学直後からいきなりロシア語の授業が毎日始まり、最初は授業についていくのに苦労しました。ネイティブの先生の授業は、回を重ねるに従って、できるだけ日本語を使わずに行われるようになっていったので、特に大変でした。ネイティブの先生の授業では、例文を何度も繰り返し音読し、また先生とロシア語で会話することを通して、ロシア語を学んでいきました。毎回授業が終わる頃には、音読の繰り返しで口が疲労し、授業が体育のようだと感じたこともありました。しかし、先生による丁寧なトレーニングのおかげで、ロシア語の格変化や動詞の活用、アスペクトといった文法への理解を深めていくことができました。

特に印象的だったのは、ネイティブの先生が行った最終試験です。学生は事前に準備したテーマについてロシア語でスピーチをし、その後、それに対する先生の質問に答えます。ロシア語の様々な能力が問われる、実践に即した試験でした。ロシアでは期末試験が口頭で行われることが非常に多いと先生から聞いていましたが、こうしたロシアのスタイルで試験を行うことは日本では珍しいことですし、個人的にも楽しかったです。

ロシア語 TLP では授業が文理合同で行われます。様々な分野に興味を持っている仲間たちと一緒に授業を受けることができたのは、とても大きかったと思っています。仲間たちの多くはロシア語のみならず、様々な言語に興味を持っていました。有志で春休みに言語学習の自習会を開いたり、あるいは TLP 研修の行き先がアルメニアになったと決定してからは、アルメニア語の学習を一緒にしたりと、TLP での学習は常に多言語性にあふれていました。TLP という名前ながら、3 言語よりもたくさんの言語に触れられる環境でした。

TLP でロシア語を学習し、また海外研修に参加したことで、世界におけるロシア語の状況にも関心が向くようになりました。ロシアに行くことは叶わなかったのですが、海外研修でアルメニアに行って、実際にロシア語を使って現地の人々とコミュニケーションを取ることで、ロシア語という言語が抱えている多様性を感じることもできました。このことを通して得た経験は、現在のウクライナ侵攻に伴うロシア語を取り巻く状況や、あるいはこれから自分がロシア語とどう関わっていくかということを、個人的なこととして考える上でも生きてくるだろうと感じています。

先生方に対して感謝の気持ちでいっぱいです。ご清聴ありがとうございました。

韓国朝鮮語

鹿毛　茉弥

私は文科一類の 1 年生です。まず、TLP を受講して良かったことを 3 つお話ししたいと思います。

1 つ目として少人数制であることが挙げられます。今年度の履修者は文系 4 人、理系 4 人の計 8 人で、他の言語に比べても特に少ないと思います。一人ずつを丁寧に見て下さるのはもちろん良いことなのですが、例えば大人数の授業で会話の練習をする場合、「隣の人と各自話してください」となるのに対し、少人数であればクラス全体で話を共有することができます。先生が文法面などで、私たちが行き詰まった時にその都度直して下さることも、とても良かったです。あとは、文系と理系の混合クラスだったので、理系の友達ができたこともとても大きかったです。一昨日まで、8 人でスキー旅行に行ってきまして、本当にこの 1 年で仲が深まったと思います。

2 つ目は授業の進め方についてです。先生は K-POP の歌詞や CM に出てきた表現を授業で扱って下さり、「勉強、勉強」という感じが少なく、とても楽しかったです。また、音声宿題というものが毎週出ます。TLP ではない一列や二列の授業では単語や文法がメインに教えられますが、この音声宿題などを通して会話力を磨くことができました。発音も細かくチェックして下さり、これも少人数ならではのメリットであると思います。

3 つ目は受講条件に関することです。韓国朝鮮語と英語とも、修了の条件はとても厳しく、そのことが TLP に残れるよう必死で勉強するモチベーションになりました。クラスの仲間がこの厳しい受講条件をクリアしていることもまた刺激になっています。さらに、来年の夏に予定されているソウルでの研修もまた、私にとって大きなモチベーションになっています。

TLP で大変だったこととしては、少し下らないことかもしれませんが、1 限に授業が行われることが週 3 回もありました。遅くまでアルバイトやサークルに勤しんでいるクラスメイトも多かったので、その日の授業に影響が出てしまっていた人も少なくなかったかなと思っています。

今後の TLP の改善点については、先ほど申し上げた通り、1 限から他の時間に授業を動かすことが可能であれば、その方が望ましいかと思います。また、TLP の授業構成は、初級インテンシブが週 2 コマ、初級演習が週 1 コマだったのですが、初級演習の教材や授業内容は TLP 生以外のものとほぼ同じなので、より応用的な内容が TLP に見られると良いかもしれません。しかし、全体的に言えば、TLP を受講したことで語学力が向上し、優秀な仲間や素敵な先生に出会えたことから、TLP という制度には個人的にはとても感謝しています。私はまだ 1 年生ですが、TLP を受講して良かったと既に思っていますし、今後も頑張って続けていきたいです。ご清聴ありがとうございました。

スペイン語

高橋　陶太

3 日前でしたか、聞き慣れない通知音が夜中に携帯から鳴りました。確認したところ、クラウディアという人から WhatsApp でメッセージが来ていました。「昨日君たちの夢を見たので、大丈夫か不安になったから連絡したんだよ。元気？」といった内容でした。夢に見たから不吉だと思い、連絡したらしいのです。クラウディアは中米ホンジュラスの人なのですが、中米の人々は、日本人が血液型や性格診断を気にするみたいに、星座や夢の中のことを気にします。メッセージを見て、ちょっと笑って、眠気が取れてしまいました。

クラウディアとは TLP のメキシコ研修中に出会いました。30 歳ぐらいの女性で、レズビアンで、ホンジュラスの LGBT 支援団体で働いています。偶然に出会って、意気投合して、研修からもう半年以上経っているのですが、未だに連絡がとにかくたくさん届くんです。卒業旅行として、仲の良い人たちとクラウディアを訪ねて、ホンジュラスを案内してもらおうという話にもなっているほどです。

この話はスペイン語 TLP の良かった点を象徴していると思います。スペイン語 TLP では、他の言語に比べても、海外研修に行ける人が圧倒的に多いのです。私の学年では、希望者はほぼ全員行くことができました。研修先のメキシコでは、スペイン語を練習することと同時に、人々とのかけがえのない関係を作ることもできたのです。この機会の広さは今後も続いてほしいところです。

もう一つ、人とのつながりについて言えば、スペイン語 TLP では先生との距離がとにかく近くて、すごく仲良くして頂いていると思っています。授業の度にスペイン語を話すわけで、日常的に使う機会ができるからこそ、スペイン語がとても上達したと思っています。周りにいる TLP の生徒たちも、本人たちには絶対言いませんが、かけがえのない関係を築けていると思います。僕はサッカーが好きだからという適当な理由でスペイン語を選んだのですが、みんなが多様で、アクティブで、陽気な人が多くて、それが楽しいです。お互い仲が良くて、美味しいタコス屋さんがあれば、そこにみんなで行くこともありましたし、五月祭でメキシコ料理の店を出そうという計画もしています。

僕は今年、スペインに留学するのですが、TLP のコミュニティがなかったら、多分それを選択肢としても考えていなかったでしょう。自分の周りに仲のいい人がいて、情報をくれたり、やる気をくれたり、時には自分より上の能力をもっていることから、頑張ろうという気になったり。そういう感じで、静かにお互いを刺激し合っている空間が TLP のコミュニティで、そこに属せたことは自分にとって大きかったと思います。

最後に、「TLP はとても大変だ」という意見はあると思うのですが、個人的にはむしろ、TLP を取ってよかったと思っています。他の言語の授業も TLP のおかげで楽になりましたし、楽しい経験がたくさんできて、結果的にあまり負担にはならないと思うので、ぜひ TLP をお勧めしたいです。

第3部

TLP修了生の現在

中国語

大門　かおり（経済産業省）

私は資源エネルギー庁国際課に勤務しております。2017 年から文科一類で TLP 中国語を履修しました。2021 年に法学部を卒業後、経済産業省に入省し、現在の部署では外国政府やエネルギーに関連する国際機関との協力関係の構築や交渉、国際会議への参加や運営、そして日本の立場の発信を行っています。例えば、G7 や G20 は皆さんも聞いたことがあるかと思いますが、参加国にはエネルギーの生産国と消費国の両方が含まれています。また、日本が主催する AZEC と GX ウィークといった国際的な会合も重要な場です。大臣の発言や会談の準備、参加者の招待といった作業もあります。入省 1 年目には全く出張がなかったのですが、その後は産油国の多い中東地域、欧米諸国にも行くようになっています。若手の国家公務員ということで、日々慌ただしく過ごしています。

私がこれまでに取り組んだ主な業務としては、ウクライナ情勢に伴う政省令の改正があります。ロシアやベラルーシに対して世界各国と共同で効果的な制裁を行うべく、輸出の規制を行う文言を作成するのですが、その規制によって日本の企業に影響が出ることを考慮した対応が求められます。また、最新のものとしては、昨年 12 月の COP28 において、日本としての利益を考えつつ、脱炭素化に貢献すべく世界の標準を作っていく交渉に、苦労しながら取り組みました。

こうした 2 つの業務では、私が TLP で得た知識やスキル、能力が生かされたと思います。TLP では話すことや書くことなど、とにかく表現するということに重点が置かれています。何度も発音を直されるなど、心が砕かれるような経験もしましたが、同時に先生方からの励ましも頂いて、高みを目指してスキルアップできました。また、3 度の研修では大学のみならず、普通の学生では足を踏み入れられない政府機関や企業を訪ねる機会もあり、非常にありがたい経験だったと思います。中国語の検定試験である HSK では最高難度の 6 級にも合格できました。TLP で得たトライリンガルなスキル、問題解決能力、知識を広げることの貪欲さと、そして忍耐力と努力という 4 つのことは、先に話しました私が携わってきた業務に直結していると感じております。

最後にお伝えしたいことは 2 つあります。まず、東大の学生のために、そして日本の社会のために TLP をこれからも継続し、卒業生のコミュニティがより大きくなってほしいです。2 つ目は、国家公務員は TLP の学生にとって理想的なキャリアになり得るということです。残業時間の多さなどが指摘されてはいますが、能力を生かす機会として、これから TLP を履修する方々が国家公務員となることを検討してもらえればうれしいです。学生の皆さんと先生方のさらなるご活躍をお祈りしております。

ドイツ語

中桐　雄一郎（東京大学医学部医学科）

私は 2018 年に東京大学に入学し、その年の春から TLP ドイツ語の第 3 期生となりました。その後、医学部医学科に進学し、現在 6 年生です。卒業後は、医師国家試験に合格していれば、初期臨床研修を行う予定です。

TLP では様々な角度からドイツ語を習得しました。作文や会話など、自分でドイツ語をアウトプットする機会が多く、授業に取り組めば取り組むほど、言いたいことを自分で伝えられるようになることが実感できました。2019 年 3 月には、TLP の国際研修でケルンに 3 週間滞在し、ケルン大学で留学生向けに開講されているドイツ語の授業に参加しました。大学では世界の様々な国から来た留学生と知り合い、非常に貴重な経験となりました。授業のない週末には、周辺の様々な街を訪ねました。TLP の授業のテキストで登場したアーヘンの大聖堂を見た時には、非常に感動したのを覚えています。

TLP 修了後、私は医学部に進学しましたが、そこでドイツ語を役立てる機会は残念ながらほとんどありませんでした。ただ、ドイツ語が戦前の医学で広く使われていた名残が医療従事者の使うスラングの中に残っていまして、その言葉の由来が分かり、面白く感じることはあります。例えば、指導的な立場にある医師のことを「オーベン」と言うのですが、これは「上に」を意味するドイツ語の単語から来ています。また、自分と同じ年ぐらいの同僚のことは「ネーベン」と言い、これは「隣に」を意味する語に由来します。面白いのは、「オーベン」と「ネーベン」の中間、自分より少し先輩の医師を指す言葉として「チューベン」があることです。これは「オーベン」という単語が「大きい」と読めることに対応して、「中くらい」という意味で作り出された和製ドイツ語です。

TLP での学びが生きていると感じる最大のポイントは、色々な世界と出会うことで、自分の視野が広がり、人生が豊かになったことです。TLP 修了後も、ドイツ語を忘れてはもったいないと思い、様々なドイツ語の授業を履修しました。例えば、3 年生から 5 年生にかけては、TLP でもお世話になりました石原あえか先生の授業で、先生のご専門であるゲーテの著作を読みました。また、ドイツ語をきっかけに自分の趣味の世界が深まったと感じられることも数多くありました。私はバロック音楽を聞くのが大好きなのですが、バッハの作ったカンタータや受難曲の歌詞の意味が分かるようになり、音楽も以前と比べて深く楽しめるようになった気がします。また、小さい頃に翻訳版でよく読んでいた児童書であるプロイスラーの『大どろぼうホッツェンプロッツ』を十数年ぶりにドイツ語で読み直し、改めて面白い作品だと思いました。

ドイツ語に限らず、新しい言語を学ぶということは、新しい視点を身につけることにつながると思います。身につけた言語が様々なものとのつながりを開く扉になるという楽しさを、TLP を通じて知ることができました。先生方に感謝申し上げますとともに、語学に取り組んでいる方、そしてこれから取り組もうと思われている方にも、語学を通じた素敵な出会いがあることをお祈りしております。

フランス語

小笠原　日奈（外務省）

私は2017年に理科二類に入学し、TLPでフランス語を学び始めました。2019年には教養学部教養学科地域文化研究分科フランスコースに進学し、2021 年に卒業した後、外務省に入省しました。外務省でもフランス語を研修言語として割り当てられ、昨年夏より在外研修で、ストラスブールにある国立公務学院（INSP）にて公共政策や行政について学んでいます。

私は大学入学時点でフランス語を全く学んでいなかったのですが、TLP に参加した結果、プログラム修了時にはフランス留学に必要とされるCEFRのB2に到達することができました。

TLP では、フランス人の先生の授業は初回から原則全てフランス語で行われました。最初は慣れるまで結構大変でしたが、初期の段階で集中的に学んだおかげで、しっかりとフランス語の基礎を築くことができたと思います。授業の内容も、日常会話から社会的なテーマに関するディベートまで本当に様々で、現在のフランス生活でもあらゆる場面でこの経験が役に立っていると実感しています。

TLPの研修では、私は1年生の冬と2年生の夏の2回、短期研修に参加しました。特に2回目の研修では、フランス西部の都市アンジェで2週間ホームステイをしながら、現地の大学に通いました。授業では、学生が先生を遮ってまで発言し、「家族」のような抽象的なテーマについてディベートになった時にも、的確に自分の意見を言語化していることがとても印象的でした。

TLP で得られた友人をはじめとする人間関係についてもお話ししたいと思います。私はTLP フランス語の理系クラスで学びましたが、そのクラスの学生はもちろん、一緒に研修に行った文系クラスの学生ともとても仲良くなりました。全員が知らない言語を一緒に学んでいくという状況だったからこそ、こうした関係が築けたのだと思います。TLP が終わった後も、さらには大学を卒業してからも、TLP のメンバーで一緒に遊びに行く機会が何度もあり、一生大事にしたいような友人に恵まれて本当に良かったなと思っています。また、先ほどお話しした 2 回の研修では、フランスでもたくさんの友人に出会うことができました。特に 2 年生の夏にアンジェに行った際にお世話になったホームステイ先のホストマザーとは今も連絡を取り合っています。昨年夏にはフランスで5年ぶりに再会し、研修の時よりも上達したフランス語でたくさん話すことができました。また、大学では週に1回、各自お昼を持ち寄ってフランス語で話す「しゃべランチ」という時間があって、そこでもTLPの先生と話したり、TLPの先輩や後輩と知り合ったりすることができました。

一言で言うと、TLP のおかげで大学生活が本当に実り多いものになったと思っています。TLPに関わってこられた先生方に改めて感謝申し上げます。そして、今 TLP で学んでいる、またはこれから学ぶ機会がある学生の方には、この貴重なプログラムを目一杯活用して、語学の勉強を楽しんでほしいです。私も今後、フランス語とは長く付き合い続ける予定なので、うまずたゆまず勉強を続けようと思っています。ご清聴、ありがとうございました。

ロシア語

山田　涼華（東京大学公共政策大学院修士課程）

私は TLP ロシア語を修了し、現在は東京大学公共政策大学院修士課程に在籍しています。入学前からロシアの外交に関心があったことから、第二外国語にロシア語を選択し、折角ならインテンシブに勉強できる TLP で学びたいと思い、参加を決めました。

授業では、ロシア人の先生からソ連時代の思い出を聞いたほか、音楽や映画、文学などロシアの多様な魅力を紹介して頂きました。一方で、ウクライナ侵攻等に伴い、ロシアは現在、非常に一面的な見方をされています。私自身も侵攻が始まった当初、「ロシア語を勉強している」と言いにくくなった空気を感じていました。しかし、ロシア語と真剣に向き合った TLP での学びを通じて、このような情勢の下でも、ロシアに対する多様な視点を持ち続けられていると思います。

また、TLP は私にとって、言語を一生懸命学ぶ初めての場になりました。大変複雑な文法には苦労したものの、そのことも含めて良い経験になりました。私は様々な言語を少しずつ勉強するのが好きなのですが、言語学習自体のハードルを下げてくれたのも TLP での経験のおかげかと思っています。

さらに、クラスメイトはロシアに対する幅広い関心を持っていて、周囲から多くのことを学びました。1 年次からロシア語の小説を読みこなす人がいたり、ロシア語を学ぶきっかけも医学やユーチューバーなど様々でした。私もまた、ロシア語の習得を通じて絵画に興味を持つようになり、特に波の風景画を多数描いたアイバゾフスキーが大好きです。この画家はウクライナで生まれ、帝政ロシアの画家として活躍したのですが、両親はアルメニア人であり、まさにロシアの複雑性を象徴する人物です。

後期課程では教養学部の地域文化研究分科に進学しました。この時期は東アジアや中東に関する勉強に多くの時間を割いたのですが、ロシアへの関心は持ち続けていました。例えば、ロシア人留学生と数年にわたって日本語とロシア語を教え合っており、家族でロシアを訪れた際には、現地で食事もご一緒しました。

私は先日、学生時代の締めくくりと言える修士論文を提出しました。昨年夏に起きた、ロシアの傭兵集団であるワグネルグループの反乱に衝撃を受け、修士論文でもこの反乱を扱いました。また、この 1 年間、学業と並行して、外務省国際協力局で働いています。ワグネルがサヘル地域の紛争に大きく関わるなど、いわゆるグローバルサウスにおけるロシアの影響は非常に大きくなっています。仕事を通じて、学術的な視点だけでなく、外交の視点からもロシアを見られるようになったと感じています。4 月からは JICA に入構しますが、ウクライナ侵攻、ガザ情勢、そしてアフリカ諸国のクーデターなど、紛争に関わる地域に住む人々が再び安全な暮らしを取り戻せるような仕事をしたいと思っております。

本日はこのような場でお話しする機会を頂き、懐かしい先生方のお名前を Zoom 上で拝見できたことを大変嬉しく思っております。これからも TLP が末長く続き、学生のみなさんに様々な良い影響と経験を与え続けるものであることを願っています。

韓国朝鮮語

西岳　和生（東京大学文学部人文学科倫理学専修課程）

私は学部 4 年生で、卒業後は大学院修士課程への進学を希望しています。現在、大学院入試の結果を待っているところです。

TLP 韓国語では非常に濃密な授業を受けることができました。1 年生の時点で、ある程度日常会話であれば、ネイティブの人とも話をできるかもという自信がつくほど、語学力を身につけることができました。1，2 年生の時に受講した数ある授業の中でも、韓国語の授業が一番楽しかったです。

私は 1 年の A セメスターから TLP に編入しました。入学時に TLP を選んだわけではなく、そもそも韓国語を第二外国語に選んだ積極的な理由もありませんでした。東京大学では、第二外国語の選択にあたって二つ希望を出すことができます。入学が決まり、何を第二外国語として学ぼうかと考えた時、まず思い浮かんだのがフランス語でした。世界史が好きで、近代と言われるような時代においてはフランス語が今の英語のようなグローバルな言語であったことを知っていましたし、フランスの国のイメージとして、何だかかっこいいなと思っていました。ただ、もう一つ希望を書く枠もあるのだから、偶然の要素があってもいいんじゃないかと感じ、自ら進んで選ばないだろう言語として、韓国朝鮮語も記入しました。世界史の勉強では、興味を持って韓国の歴史を学ぶことができなかったので、これで当たったら、それはそれで面白いのではないかと考えました。そして、韓国語が第二外国語になったという経緯があります。

このように、行き当たりばったりで選んだ言語ではあったのですが、学んでみると、文法がとても日本語に近いこともあって、英語を学んだ時よりも、自分で習得できている実感が得られました。そして、技能がどんどん身につけば、もっと学ぼうとするという好循環が自分の中に生まれてきました。こんなに楽しく学べるなら、TLP に編入してみたいと思い、試験を受けて、無事合格することができました。

韓国語の TLP は私が入った時点で、学生が私を含めて 3 人だけという本当に少人数のグループでした。先生との距離は本当に近く、今振り返っても驚くほど上達できたのは、本当に TLP の制度のおかげだと考えています。

TLP で学んだことをどのように現在活かしているかについては、正直なところ、直接的にはあまりできていないように思います。倫理学を専攻しているのですが、大学院入試の外国語試験では韓国朝鮮語が選択できなかったので、英語とフランス語で試験を受けました。フランス語を学習する際、TLP を通してとても上達できたという自信があったからこそ、特に抵抗感なく踏み出せたという、間接的に学びが生きているのかなとは感じています。また、学問に限らない話をすると、韓国語を勉強してから、韓国の歌を聞いてみたり、韓国人の YouTube を見てみたり、あとは映画に挑戦したりと、韓国語を知らなかったら楽しむことができなかった趣味が広がったと思います。今後は、自分の専攻である倫理学についても、韓国語で書かれた文献を読んで、それを参照することで、今までの学びを生かしていくことができればと期待しています。

スペイン語

五ノ井　杏（東京大学大学院教育学研究科修士課程）

私は 2019 年度に入学した、TLP スペイン語第 1 期生です。現在は東京大学大学院教育学研究科に所属しています。まずは、TLP での学びを振り返って、3 点お話し致します。

一つ目は言語についてです。TLP での授業は言語の学習を大きく助けたと感じています。1 年次には週 15 コマの授業を取っていたのですが、そのうちスペイン語が 5 コマあったため、集中的に学ぶことができました。さらに、3 コマは全てスペイン語で行われる授業で、先生とのコミュニケーションでもスペイン語を用いたので、そこで自身の知識の穴に気づくことが多くありました。また、勉強法や授業への参加の仕方も含めて、語学に長けた学生たちとともに学ぶことから刺激を多く受けました。うまく表現できなくても、少しずつ伝わるように挑戦する姿勢を、全ての学生がお互いの中に見出していたように思います。

二つ目は文化についてです。スペイン語圏における言語を含む文化の多様性に触れることができました。とりわけ 2 年次の TLP では、新型コロナウイルス（以下コロナ）の影響でオンライン授業だったのですが、食や芸術、現地の生活を想定したスペイン語表現や背景知識などを学び、よりスペイン語圏への文化の興味が深まりました。

三つ目は人間関係についてです。入学時に地方から上京した私にとって、TLP のクラスはコミュニティのような存在でした。週に 3 回、必ず顔を合わせて同じ授業を取ることで、20 人ほどの仲間とのつながりを得ることができました。コロナを理由に履修を断念してしまう学生もいたのですが、そういった人たちとも連絡を取り合うことがあります。

TLP がその後にどう活かされたかについてお話します。まず、スペイン語やスペイン語の先生方に魅力を感じたことから、後期課程では教養学部地域文化研究分科ラテンアメリカ研究コースに進学し、スペイン語圏の歴史や文化を様々な視点から学びました。卒業論文では石橋純先生に手厚いご指導を頂き、在日中南米人の方々の来日過程や、現在の様子に関して調査し、9 名の方に、家族観にまつわるインタビューも行いました。調査先では、彼らのフェスティバルに参加し、楽器や料理を直接体験するなど、教室で学んだことが目の前で現れるような経験を多くすることができました。授業以外の場でも、スペイン語を母語とする、あるいは学んだことのある東大への留学生とも知り合うなど、人間関係が豊かになりました。

2 週間のメキシコ研修はコロナを理由にオンラインで行われたのですが、私は現在、同じく第 1 期生の友人とともに、メキシコを訪ねております。先日、留学中の第 3 期生の方とお会いしましたし、TLP 研修で知り合ったメキシコ人の友人などとも今後会う予定があります。TLP に所属していなければ、こうしたつながりを持つ機会を得ることも、今メキシコにいることもなかったでしょう。TLP でお世話になった方々に感謝申し上げますとともに、これからも、TLP の素敵な機会を生かして、多くの学生がそれぞれの大きな学びを得られることを願っています。

第4部

TLPのこれから

TLP のこれから

寺田　寅彦（教養学部）　　鳥山　祐介（教養学部）

東京大学は現在基本方針として UTokyo Compass「多様性の海へ：対話が創造する未来」というスローガンを掲げているが、多言語を重視する TLP というプログラムの存在自体がこの方針にかなうものである。英語以外の言語を新たに学び、対話の機会を持つことが多様な世界に触れる契機となることはもちろん、他者に接することで自分の中で対話が生まれること、そしてそれが強靭な思考力を養う上で重要であることも無視できないだろう。現役 TLP 生、TLP 修了生の報告からは、各人がそれぞれのやり方で他者に向き合う経験を継続していることが実感できた。

もっとも、TLP も今後の時代の変化を見据える必要がある。例えば、これからの言語教育は AI、機械翻訳の技術の進歩を前提として考えるべきだろう。「機械翻訳の限界」は「英語のみのコミュニケーションの限界」と重なる面もあるため、第 3 の言語を学ぶ意義を自省する経験は機械翻訳をめぐる問題にも一部応用可能である。また、ウクライナ侵攻に見られるように一極的な国際秩序が挑戦を受け、メディアによる情報戦が繰り広げられるという現実の中で、複数言語を運用できることは自分の考えを持つ上で大きな意味を持つだろう。

TLP が持つ人材育成の面にも目を向けたい。人が成長するということは、新しく形成されつつある未知の自分とのせめぎ合いであり、それは他者に接して生まれる自分の中の対話と通じるものだ。この対話の入口に言語があり、とりわけ本学の多くの学生にとって第一言語である日本語がある。TLP ではこの日本語が出発点となる言語とされているが、トライリンガル、3 言語のひとつである日本語の位置づけについて今後考えていくべきだろう。TLP 生の多くにとって日本語が第一言語であるからこそ、学生が自分自身の考えを形成する日本語により意識的に接することが必要なのだ。たとえば日本語を外国語として学ぶ人と接することで、異なる視点から自分の使う日本語を見直すことができるだろう。このような経験は国外だけではなく日本国内でも可能なことで、実際に東京大学に入学する学生が日本語を第一言語としているとは限らない。キャンパス内で出会うさまざまな言語背景の学生との交流を通じて、自分自身の精神を形成している日本語という言語と文化の多様性に気づくことができるだろう。

言語と文化の緊密な関係は、複雑で多様な世界のあり方を理解させてくれる。スペイン語を話すメキシコでホンジュラスの人との出会いがあったり、日本国内にも一般に外国語とされる言語を第一言語として生活をしているコミュニティがあったりする。多言語・多文化の世界が一筋縄ではいかないこと、日本語もその多様な世界観を構成する一つの要素であること、そして多言語を使いこなすことで新しいロゴスを獲得できること、それはまさに対話が想像する未来という多様性の大海原だ。そしてそれは 10 周年を迎えた TLP が目指す広い海の地平線なのである。

© 2024
東京大学　大学院総合文化研究科・教養学部
グローバルコミュニケーション研究センター
トライリンガル・プログラム (TLP) 委員会

2024年3月31日